

『男性／女性 差異の思考』より

第七章「半身像、裸足、片足跳び」試訳

“Half men, bare feet and hopping on one foot” in F.
Héritier, *Masculine/Feminine: differential mind*

横山 安由美

Ayumi YOKOYAMA

【解題】

フランソワーズ・エリティエ（Françoise Héritier, 1933-）はレヴィ＝ストロースの後を継ぐフランスの人類学者である。フィールドワークに基づいた婚姻理論の研究で知られるが、男性・女性の表象の生成メカニズムも彼女の研究課題のひとつである。「強い／弱い」などといった男女を分かち二元論的思考は、生物学的な差異に直接起因するのではないにもかかわらず、しばしばその差異に拠るという「見せかけ」をとりつつ、作られ、普及してゆく。割り当てられる具体的な属性は地域ごとに異なるものの、ことさらに差異化かつ二元化される傾向にあることと、〈男〉に肯定的な価値が〈女〉に否定的な価値が与えられることは、世界中で共通する。

本稿では、『男性／女性 差異の思考』（*Masculin / Féminin I La pensée de la différence*, Odile Jacob, 1996）のうち、古代から頻繁にみられる横向きの半身像についての人類学的考察が行われる第七章の試訳を試みる。

【翻訳】

第七章 半身像、裸足、片足跳び ——男性性の古代形象——

ご存知のとおり、「裸足」の主題は古典古代の作品やヨーロッパ

パの民話によく見られるモチーフで、最もよく知られている事例が「シンデレラ」である。ロドニー・ニーダム¹はこのモチーフを検討材料に取り上げ、なぜ習俗 institutions は「地域ごとに」変化をするのかというそれまでなおざりにされてきた問題に答えを見つけようとした。

その一方、こうも指摘する。ある種の習俗には特有の力があって変化することがない。それは生物学的なものもつ構造的な力に由来しているようだ。親子関係や婚姻関係の法則、左側に対して右側が普遍的に優越する左右非対称の法則などが一例だ。後者の左右非対称の法則について、ロベール・エルツはこう言う。脳髓という器官は純粹に左右非対称にできているために、そこで生まれる思考は象徴形成において二元的な論理に向かうのだらうと。すでに見たとおり、生物学的特性による強固な「制約〔強制力〕」contraintesの前では、無限にあるはずの可能性のうち「限られたもの」しか現実とならない。

そう考えれば、ある種の社会現象が変化しない理由を、理解し、説明することもできる。それというのも、このような制約は社会的な性質をもたず、生物学的なものに根づいていると思われるからだ。

しかし——まさにこれがニーダムの投げかける疑問だが——、一見して生物学的な必然性によって説明のつかない表象が執拗かつ持続的に存在するケースはどのように説明したらよいのか。

横向きの半身像

ロドニー・ニーダムはこのタイプの習俗や象徴的な表象の例として、一般的には男性の、人間の半身像を挙げている。垂直に切り取られ、たいていの場合右側から見た像である。

この像はほぼ普遍的に広まっていけるものの、象徴的な次元での要請を別にすると、存在してしかるべしという制約をとくに受

けているわけではない。ニーダムによれば、多くの場合、その地理的分布は伝播と借用によって説明がつくとされる。

さまざまな神話や民話や図像に見られるこの半身像【図1、2、3²】は、目を一つ、腕一本、足一本しかもたず、どのような文脈で現れるにせよ、いつも同じ形体をとっている。人間または神話上の人物として、腕を伸ばし、膝を軽く曲げ、今にも動き出しそ



図 1

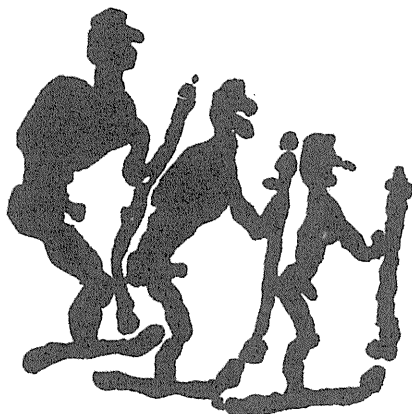


図 2



図 3

うな姿、一本足で跳びはねたり滑り出したりしそうな姿で表される。



【図A】「非対称の像は力の強化を象徴し、暗示する。だがすべての力というわけではなく、創造的または生殖的な力のみである」エジプトの豊穡の神ミン Min は一本の足と一本の腕しかもたない（ルクソール神殿の浮き彫り）。

* 図2、3 および図Aはダヴィッド・リグレの再描による。

こうした固定的な形体はこれといった生物学的な必然性を有していないため、集团的無意識、心的な psychique 不変項に、帰されるのではないだろうか³。解明すべきはその部分であろう。

このモチーフはオーストラリア、ティコピア島〔ソロモン諸島〕、マルケサス諸島、ニューギニア、インドネシア、中国に、あるいは、ギリヤーク族〔樺太〕、ヤクート族〔シベリア〕、サモエド族〔シベリア〕、ブリヤート族〔ユーラシアのモンゴル系の一派〕といった民族、また、インド、セイロン島、ヨーロッパ——ルーマニア、ギリシャ、ドイツ、アイルランド——、アラブ世界、アフリカ、マダガスカル、あるいは、エスキモー、太平洋インディアン、平原部族〔インディアン〕、イロクォイ族〔インディアン〕、アステカ、果てはフエゴ諸島〔南米大陸南端〕の絶滅した種族にも見出せる。

シライの神話物語

ニーダムはボルネオ島のンガジュ族 Ngaju におけるシライ Silai の神話物語を詳説している。物語の概要はこうだ。最初の男と最初の女にはとても美しい娘がいて、〈月〉Lune の神ジャンガ Jangga が見初める。地上に降りて彼女を娶り、新月ごとに訪れてくる。

彼女は妊娠し、タブーに触れてしまい、ちょうどこの時期に夫に会うことを禁じられる。性的関係をもつ期間であるはずの新月に、夫は妻に触れることができない。

怒ったジャンガは自分の領土である月に帰ってしまう。この状況に直面して妻はこう抗議する。そんなことをなさっては化け物が生まれてしまいますよと。妊娠中の性的関係が胎児をこしらえ、形づくり、完全なものにするのだということが、妻の危惧において暗示されていると考えてよい。

シライは尋常ならざる姿で生まれてくる。というのも、片側だ

けの身体だったのだ。長じて父親のことを尋ね、艱難辛苦の旅の果てに父親の元へとたどり着く。父親は自分の息子だとはわからに信じられない。様々な試練を課すと、息子は果敢にそれらを切り抜ける。そこで父は、息子を作り直してやろうと試みる。やすりにかけて元の姿をなくした後、るつぽで溶かす。そこに「命の水」*eau-de-vie*、つまり子作りに必要な自身の提供物を加える。父親が燃えさかる塊から完全な人間を作りあげると、この人間は地上に戻り、機知を働かせ白人たちの祖先となる。

この物語は一つの範例であり、他の地域にも種々の類型が見出される。頻度はそれほどではないものの、また別のテーマがスンダ列島のロチ族 Roti に存在する。それはたいそううぬぼれの強い女の話で、「独りで子作りする」ことを望んだため稲妻に引き裂かれ、片方が男性、もう片方が女性になったというものである。

記録された物語を総覧しても、他のモチーフとはこれといった関連はなさそうに見える。ニーダムは他の研究者の後を受け、説明を要するのはその形象そのものであって、それが置かれた文脈ではないと結論づけている。

解明ということ言えば、過去には次のようなものがあった。

A・サボー⁴（一九四一）によれば、神話には「個人」という発想はなく、「カップル」しかない。ギリシャ思想における原初の人間がこれに該当し、その人間たちは二分割され、各々がその片割れを探し求める。であるならば側面像は、奇想天外なもの、絶対的な怪物性、個人、を表象することになる。

グードムンド・ハット⁵（一九四九）は、これよりは凡俗な発想の持ち主で、地域の人々の想像をかきたてた実在の怪物たちの図像化にすぎないとする。その意味では、どれほど多様な場所で見つかるにせよ、このモチーフは毎度個別に創出されたという論に与している。なおニーダムとは言えば、図像の伝播説を信奉していたことを思い出しておこう。

A・E・イェンゼン⁶（一九五〇）の論法は目新しくて巧妙だ。人体が顕著な左右対称をなしているからこそ、必然的に人間の精神は非対称形体〔半身像〕の存在を思いつくというものである。この仮説はもっともらしく見えるが（合同形と対称形を同時に表象することの必然性）、だからといって全てを解明できるわけではない。

W・デオンナ⁷（一九五九）は、半身の中に、力の究極の集約、完全性を見る。増やすこともそうであるが、逆の操作である単一性への還元もまた、表象されているものを強化するからだ。ある意味では、同じ力の表現として、側面像と、ヒンズーの靈廟の無数に手足のある人物像は対をなす。だから一本足の人物は強度を著しく増した魔術的な生殖能力をもつことになるだろう。この点については後述したい。

最後にドミニク・ザアン⁸（一九七五）は、平衡概念が極まって側方概念に置き換わったものとして半身像をとらえる。

どの説明もそれなりに有効ではあるが、事象のすべてを十分に解明しきれものではない。

ニーダムは、特異で自律的なものとしての当該モチーフの有効性を強く押し出すかたちで実証を続けてゆく。その形体は曖昧さがなく明確に定まったものなので、他のいかなる形体とも絶対に混同されることがない。

だが、想像力の源泉が無尽蔵であることを考えるならば、一つの根本的な問題にぶつかる。切断にあたって選ばれたのがなぜ二分法なのか、さらにはなぜ縦割りなのかということだ。さまざまな可能性からこの分け方を選んだのは、知的以外の何でもない操作〔切断／手術〕opérationの基盤として、なにかしら肉体的 somatique なものがあったからだ。

知的な操作 切断する、だがどこを？

〔縦割りもまた〕肉体上の分割には違いないにしろ、人体のさまざまな場所に切り目を入れることができる。例えば、多くの怪物的な形体は、水平に切断されている。

そのような多様性のなかで、垂直な縦方向の切断の選択は「対称〈対〉非対称」の原則を基盤にしている。

身体を二分するうえで他の方法を思い描くのは難しいとニーダムは述べる。

話は逆だと思われ、これ以外の様式で身体を切断することは、十二分に可能であり、想像でき、考えることができ、実現可能である。例えば、(二つの顔が後頭部でつながった) 双面や、脚のついた頭部である。この場合、対称の原則とは明らかに無縁である。双面を除くと「前面／背面」の垂直の切断例はない。

水平方向の切断の表象も存在する。アステカ神話では、最初の男と最初の女は下半身をもたなかった。別の例では、上半身が下半身以外の台座のようなものの上に載っていたり、下半身が頭部に直接ついていたりする。ユルギス・バルトルシャイティス⁹が採りあげた怪物像の示すところである。

中国には、こう言ってよければ、二重の意味で側面的と言える神話上の人物が存在する。右腕一本に左足一本、あるいはその逆をもつ者であり、組み合わせパズルの欠けた駒を補う男あるいは女と結婚する。

プラトンは『饗宴』の中で人間の起源について語っている。人間は、最初は球状の生き物であり、背中がくっつき、四つの腹部、四本の手、四本の足、二つの同じ顔を持っていた。この生き物は転がって動き、強大な力を有していた。だが傲慢だったせいで、とうとう神々に刃向かってしまう。ゼウスはその共同体を弱体化させるために、人間を二分割し、ついでに〔自分たちの役に立つように〕数を増やそうと思いつく。

両性を切り分けるとともに性差を創出するこの分割が、この場合、生殖能力を凝集させるのではなく、弱化させていることに注目したい。少なくともゼウスは生殖能力を別々に割り当てた。

性を分割された人間はそれ以降二本足で歩くことになる。「だが」とゼウスは脅す。「人間たちが悪い振る舞いを続けるのなら、奴らをさらに半分に切り分けてやる。そうなれば今度は一本足で飛び跳ねることになるぞ。」〔作中で〕アリストファネスはこう論じる。「その後おとなしくしているだけまだしも幸いというもの。さもなければ、私たちは鼻梁に沿って二つに切り分けられてしまうだろうから。」ゆえにここでは、側面に沿った垂直方向の二分ということが直接的に問題になっている。

例外的なことに、このプラトンの神話は、側面像の創作がギリシャ世界においてどのように構想されたかを解き明かしている。ギリシャ世界以外では、性質や性が対照をなす二つの半身は、なにはともあれ繋がったままである。インドでは、シヴァ・アルダーナリシュヴァラ〔妻との合体形のシヴァ神〕は半分女性の神である。右半身は男性であるが、左半身は女性であり、女性らしい衣装や装身具を身に着けている。また多くの通過儀礼において儀礼に与る者の身体は、二つの異なったかたちに塗り分けられる。さらに、『フリークス』〔一九五二年公開、アメリカ〕という映画も参考として引いておこう。そこに登場する「怪物たち」の一人は、半分男、半分女の姿であり、髪形や化粧や衣装も、片側ずつ性に相応している。

実際には、このモチーフを表す画像は稀であり、一般的には、神話モチーフは人体に直接貼り込まれる。図画として具体的な形を取る場合、右半身が描かれる。

だが民族誌学の文献では、側面体の人間が話題になるとき、どちら側なのかということはいったい関心事ではないようだ。あたかも側面性は副次的な特徴でしかなく、枢要なのは二分法そのも

のであるかのようだ。つまりそれは「二分割された人間」であって、右半身だけになった人間ではない。

側面像の心的な力

これまで見てきたとおり、ニーダムを含む論者のほとんどは、このモチーフがなんらかの単一起源から生まれ、それが「伝播」したと考える傾向があった。シベリアとマルケサス諸島を経由した、西アフリカとフエゴ諸島の間の伝播をもいつかは証明できるだろう、とニーダムは期待している。

しかしながら、伝播説によってしてもこのようなグローバルな広がりやをうまく説明することができない。このモチーフがそのつど個別に発生した可能性があること、したがって発生原因は人間の精神に内属したさまざまな特性に見出せるということをニーダムも認めざるをえないだろう。

もっとも、あれこれの場所への主題の伝播を想定するにせよ、このような主題が形成される内的必然性を考えるにせよ、直面しているのは同じ問題である。というのも、ずっと以前にフランツ・ボアスが提示した概念を用いれば、特定の主題が伝播するとしたら、それは伝播の途上で同じ主題を待ち望む内的な欲動と出会うからなのだ。筆者に言わせれば、発するべき本当の質問はまったく別のことだ。このモチーフがどこにでも見つかるわけではないのはなぜか。

この疑問に対しては次のような答え方もあるだろう。さまざまな可能性の中から今回は偶然このモチーフになっただけだ。場所が変われば、身体や人間の力や能力の神話的な表象として、異なった想像上の形象が作り出されていたはずである。他所でこの形象の代わりに使われているすべての形象を特定し、精査できるはずであると。明白な伝播のケース（インドネシア、バリ島）が多数あって、伝播説に立ち戻るにしても、それは単独では成立しがた

いひとつの仮説でしかない。論点先取に目をつむって伝播説を容認するとしても、他の場所にも容易に根づきうるような伝播力をもつ形象が、実際にはわずか一箇所でしか発生していない理由を、空想力や想像力という観点からまた説明しなければならないだろう。

細心綿密な分析を行った後、ニーダムは次の結論に達する。経験的な主要因子、すなわち、身体における対称性、さらに言えば、男女両性をあえて分け隔てようとする点で示差的とも言える対称性という下地を別にすれば、この図像は、社会的特性とも、表象上の有意な複合観念ともいかなる相関関係ももたない。

例えば、身体毀損という概念を説明因子としてとらえてみよう。デュメジルの研究が参照可能だ。法の守護者テュール Tyr は右手を失い、預言者にして見者であるオーディン Odin は片目を失う。両者とも自分の役割を担う際に必要不可欠な特性を失っている。しかしだからといって、このゲルマン神話の〔職務に必要な身体部位がまさに欠けているという〕逆説的な設定は、すべての側面像、半身像を説明しきれるだろうか。たとえ片方の側がなんらかの役割を担っているとしても、半身像の多くはそれ自体が左右のどちらであるかすらよくわかっていないのだから。

もっともこの点については、神話のテキストや言説の中ではおそらく左右の特定の必要はなく、言わずもがなで理解されている、と答えるほかはないだろう。

いづれにせよ、図像化された表象の場合は描かれているのは男性の右側であるということは、どう見ても明らかだ。

ニーダムは最後に、半身不随という身体の経験に拠ることで説明をしようと試みる。これには即座にこう反論できる。身体 of この病理学的な経験があるからといって、なぜそれが神話的 = 象徴的な表象全体の立脚点になるのか。

疑念の余地のない唯一の理由は、側面像という表象を作らざる

を得ないような重大な利害を男／人間 homme がもっていることではないだろうか。それは、どのような利害で、どのような理由なのだろうか。

期待はずれな分析を延々と続けた挙句にニーダムは、より多くの例やより良い比較方法論を用いたところで当該の疑問に対する答えは出せないだろうと結語している。言えるのは、おそらくきわめて強い心的な因子が一つの祖型の創造を促しているということだけだ。「祖型」とは、その名のとおり潜在的な意味で普遍的であり、想像力のもつ他の根源的な傾向とも相関性があり、こうして複合的な象徴機構を生み出すような何かである。その祖型的な性格があればこそ、モチーフは広く分布し、形状として安定し、そして、きわめて異質な文脈においても頻発することになる。

ゆえに、ニーダムが提示する疑問はこういうことになる。人間の想像力を側面体の表象へと——しかも右側かつ男性の側面体の表象へとつけ加えよう——駆り立てる重大な利害とはいったい何なのか。およそ知られている唯一の祖型的な形体であるものの、存在してしかるべしという必然性が強固な身体的な制約から生じているわけではない、この側面体の表象のもつ心的な力は、いったい何に起因するのか。

同じ性質をもつ、これ以外の別の祖型を人類学者たちが探査してくれることをニーダムは期待している。文脈や表象の様式がどのようなものであるにせよ、固定した形体を有し、想像界のみから発生している祖型を。だが彼自身には、もうこれ以上先に進むための手がかりがないようだ。

増殖する質料、凝集される力

「先に進む」ための要素とは何だろう。その点を議論すべきだ。

そもそも、ニーダムが力を傾注した全ての調査結果を見直した場合、先に進むための材料がないというのは本当に確かなのだろ

うか。彼の分析のうち、意味がある、またはグローバルに観察されるならば意味があると思われる諸点をまとめてみた。

第一に、側面像は当然ながら身体の線に沿っているが、身体という中性的な用語を使うと、身体は男の身体ばかりではないことを忘れてしまいがちだ。人間には男女両性ある。もっともプラトンの神話では、人間は男女の結合した球状の生き物として表された。だが神に罰せられて分離され、それぞれの片割れはもう一方の片割れを、つまり「一」に戻るための補完物を探し求めなければならなかった。

さて、神話においても画像においても、現れるのは常に「雄」vir という意味での人間の半身である。女の半身に出会うことは稀であり、その場合はいつも「霊」esprit である。

第二に、描かれるのはいつも「右側」droit である。たとえカグル族 Kaguru [タンザニア] のように、神の「良い」側はどちら側なのかを問われてインフォーマントが答えられない場合でもそうだ。

おそらく、北欧神話にかんするデュメジルの論について、さらに考察する必要があるだろう。そもそも身体毀損を受けた者は、切断によって彼の機能の本質を失うのだろうか。それとも反対に凝集させるのだろうか。

最後に、独りで子作りを望んだ女が罰せられる話とシライの物語からじつに興味深い比較点を見出すことができる。前者の場合、人間女性の身体が二つに分かれる。だからそれは潜在的に両性具有者であった。シライの場合は、子どもの父親が遠方にいたために妊娠中の性的関係が欠如し、子どもは父側の種によって「養われ」なかった。彼は仕上がっておらず、完全ではない。父親によって改めて釜の中で焼き直されなければならない。釜とは、子どもが出てきた母胎のアナロジーである。彼の人間としての身体は、やすりくずや削りくずのような状態になってしまい、そこに父親

が必要な〈命の水〉をつけ加えて、煮込んでゆく。

この物語の中には、男の「息吹＝生命の原理」pneuma が女性の質料に到達しないことから怪物的なものが生まれるというアリストテレス的な思考型が見いだせる。「息吹＝生命の原理」と質料は、性質の異なる二つの力である。

この「息吹＝生命の原理」こそが、「雄」の形をした人間の完成形を作る。女性の質料は、その無秩序な産出行為がなんら規制を受けない場合、怪物的なものを生み出してしまう。怪物性の第一の形体が「女性性」féminitéであり、第二の形体が「多胎児〔双子、三つ子等〕」multiparitéであり、第三の形体が、過剰または欠落によって目に見える「怪物性」monstruositéである。

それでは、父の関与がなく、母胎だけから生まれた片側人間のシライはどのような力を有していたのだろうか。作り直された完全体は白人たちの始祖であって、ンガジュ族自身の先祖ではないとされるが、この表象はとりたてて白人に媚びるためのものではないようだ。父親の〈命の水〉によって作り直すには、物語中で怪物的とされる側面形において女性質料の「過剰」を破壊しなければならなかった、というのだから。

W・デオンナの直観は正鵠を得ていたと筆者には思われる。単一化させようと、分化させようと、どちらでも構わない。一定の力を凝集させるか、分散させるかの違いであるからだ。

ギリシャ人においては、雄の特性こそが、唯一可能な力の凝集を担う。それは煮沸によって血液を精液という産物に変化させる。精液は、身体素材を運ぶのではなくて、燃焼して蒸発してしまう「息吹＝生命の原理」を抱え運ぶものであり、胚に形相と命とを与える。女にありがちな質料の無秩序な増殖をもたらすことはけっしてない。

父母双方の寄与の必要という、他と同じような概念的要素を基にしつつも、ンガジュ族の視座においてはまた別のイメージが作

られている。女性的な力の凝集という発想が日の目を見ているからだ。だが、そのシライが怪物扱いされているのだから、それは力の凝集の想定しがたい形ということになる。

側面像が力の凝集を表象するというこの仮説はアリストテレスとシライの神話を突き合わせて考えることで生まれたのだが、図像をさらに検証し、側面体があるのと同じ連想網に座を占めるような別の概念要素の数々を見つけることによって、おそらくここからニーダムの提示した一連の疑問に対する解答の手がかりが得られるだろう。

雄の力の凝集

これらの疑問はさらに異なるかたちで問い直すことができる。

この表象の恒常性を捉えて「祖型的」と呼ぶニーダムにとって、問題は二重になっていることに留意しよう。すなわち、存在すべしという必然性が強固な身体的制約に由来しないような祖型表象が存在すると言えるのか。また、これ以外の表象が他にも存在すると想定し、証明することができるのか。

彼の分析が期待外れに映るのは、立てた問題を二つの異なる方向性で導いたからである。一方では伝播説を採りながら、他方では、親族関係、経済的なこと、政治的なことといった、完全に別物と見なされる他領域に属する社会的与件と当該形象との間に、解明の手がかりを与えようと考えられるような恒常的な関係を追求している。

筆者の射程にあるのはまったく異なる性質の探索だ。たとえニーダムのほうで格別の関心を寄せていないにせよ、上記の物語や図像の中で重要だと指摘した諸点を通じ、側面像の概念に連なる諸概念を段階的に探索することだからである。

こうしていくつか手がかりを追うことになる。片足跳びといっても、けんけんをする者、片足の無い者、足腫れ、跛行者、

さらには素足などのケースがある。また同様に、完全体の息子を作りだすにあたってシライの父親が注入する〈命の水〉は、骨中の子種の表象や膝と雄性を結びつける表象の方向に対応物を見出すことができる（F. ガラン＝ベルネ¹⁰）。

これらの様々な手がかりのすべては取り上げない。次の連関ひとつを取り上げれば、問題解明には十分であろう。側面像と、片足だけサンダルを履く男、あるいは片足跳びをする男との間に、文脈上必然的に存在する連関である。

それには、驚くほど実証的で充実したデオンナ¹¹の研究が参考になる（一九三五および一九五九）。

祖型にあたるのは〔ギリシャ神話の〕イアソンで、〔叔父〕ペリアスに下された、片足サンダルの男に用心せよとの神託を体现する。版により異同はあるが、イアソンは左のサンダルを履き忘れるか失くした後、ある宴席に到着する。右足だけサンダルを履いている。イオルコスの王である彼の父親はペリアスによって王座を追われ、イアソンはケンタウロスのケイロンに育てられた。長じて青年となったイアソンを王座から遠ざけておくために、ペリアスは金羊毛の探索を命じて送り出す。供犠ないし祭礼の日に、左足裸足のイアソンが帰還し、ペリアスの恐れていた神託はこうして実現する。

サロモン・レーナック¹²の古典的な仮説によれば、これはサンダルによる叙任儀式の一種だという。左足裸足で現れるイアソンは自分の権利を剥奪されていることを意味し、サンダルを要求することは、王位篡奪者がもつ権力を要求することにほかならない。しかし、サンダルが表象しているのは果たして政治権力なのだろうか。

古代世界にあっては、男たちが片足裸足で行動する状況がこれ以外にも多数存在する。戦闘や狩猟に赴くのに片方の靴しか履かない戦士や狩人である。神々は右足裸足、死すべき人間は左足裸

足である。他方キリスト教の表象においては、〈神〉やイエス・キリストは両足裸足で描かれる。文献では、レギオン〔ローマ軍団〕兵士は右足だけに脛当てをつけ、逆にサムニウム風剣闘士〔サムニテ〕は左足だけに向こう脛当て *cnémide* をつける。サロモン・レーナックはレギオン兵士か剣闘士かによる左右の違いに驚き、「相異なった必要性」の現れと見ているが、それらの性質については意見を述べていない。

これ以外によく知られながら、あまり論拠のある説明がなされていない実例の中には、アイトリア人が片足しかサンダルを履かないのは「彼らの好戦的な性格のせい」だというようなものがある。当時の人間ならおそらく、あえて言葉にせずともその意を汲みとったはずだと。また左足裸足で猪狩りをするカリドンの首長たちの格好は、「狩で身軽になるための、アイトリア人たちの一般的な慣習」に应じるもので、上述のような好戦的性格に拠るのだと。

古典古代から幾度も繰り返されてきた凡庸な説明は、左足裸足の方が走りやすい、これなら足は、よりしっかりと地面をつかむというものだ。たとえアリストテレスが、逆にした方がもっと早く走れるのではと考えたにせよ、結局のところ、言をなした誰一人、あえてみずから試してみるほど利口ではなかったわけだ。右だろうと左だろうと、片足を裸足にしたところで、徒競走が早くなるはずがないのだから。

トゥキディデスも同様の説明に終始している。〔紀元前〕四二八年にプラタイアの住民が命からがら町を捨てるにあたっては、誰もが右足にしか靴を履かなかった。トゥキディデスによれば、こうすればよりたやすく泥地を渡ることができたのだらうと。

だが、各個人が片足裸足である歴史的、民族誌的に著名なケース全体を検討してみれば、それは気まぐれからでも実際的な必要からでもなく、しばしば（生前葬を含む）葬祭のための、また農

耕のための、あるいは豊穡のための儀式であったと考えることができる。

薪の山に昇ったディドー¹³は片方の靴を脱ぎ、ドレスの帯をほどき、髪をほどいた。メデア¹⁴も同じことをしている。「片足を裸足に、両肩をあらわにし、髪をほどき……」*nuda pedem, nudos humeris, infusa capillus...* そうした後に、冥界や闇の神々に呼びかけている。左足に靴を履いた英雄や神々を表す立像は数多い。例えば、地獄の秘儀の神である〔ポンペイの〕秘儀荘のあのディオニソスの壁画がそうだ。ドイツでは片側裸足の子どもは大人になれない、また、片足しか靴を履かない人間が歩いた道を通った家畜は病気になると思われていた。

デオンナの仮説の核心は、四肢のうちただ一本の足に雄の力が過剰に凝縮されるということであり、この発想がここで意味をもってくる。靴という仲立ちがなければ、その過剰な熱が地面に伝わってしまい、弱者や劣位者にとっては耐えがたくなる。子ども、動物、敵ばかりでなく、配偶者（つまりこの場合は女性配偶者ということだ、靴なしの通行人は男なのだから）や活動的な熟年を通り過ぎた老人たちも含まれる。熱さのあまり、配偶者や老いた両親は死んでしまうだろう。

一本足の中に凝縮された男性性 *virilité* の激しい熱さは、場合によって肯定的なものにも否定的なものにもなりうる。前述の迷信のあるドイツでは否定的なものだが、農業祭において片足裸足の幼い少年が運んできた牛を男たちがバラバラに解体する習慣のあるペルーにおいては肯定的なものである。

したがって、それぞれ性質は異なるにせよ、いずれも儀礼的な理由からの習俗である。

片方のサンダル、片方の脛当てや向こう脛当てだけを身につけている古代ギリシャの男たちは、なんらかのかたちで戦い赴こうとしているか、死に直面しようとしているか、地獄の支配者に身

を捧げるか、あるいは、イアソンのごとく冥界の儀式を執り行うかなのである。

増大し、強化された生殖能力

とはいうものの、(全体性を表すキリスト教の神の場合を除いて) 神々が右で人間が左、別な場面では、男が右で女が左、といった「右／左」の差異にともなって「一本足」のテーマが現れるのはなぜだろうか。

左右によって人間と神々が対比されるばかりでなく、災厄と至福も対比される。すなわち、「右足から」*dextro pede* 立ち上がったり、右足から靴を履いたりすることは幸運の願掛けであり、この言い回しは〈祝福する〉の意味をもつ。他方、左は、凶兆、死、不幸などの概念に結びつく。

古典古代では、数多くの片足跳びや不安定な片足立ちの図像が存する。それは強く性が強調されたきわめて独特な側面像の表象なのだが、これらの図像が上の問いへの答えになる。必ずしも明瞭に表現されているわけではないが、この右側から見られた男性側面像は、縦に二つに裂かれた性器をもっていないということをここで強調しなくてはならないだろう。半身が持つのは、ペニス全体である。

片足を曲げて持ち上げた不安定な姿勢でバランスをとる人物像は大量に見つかる。支えなしで片足が持ち上げられている【図4、5、6参照¹⁵⁾】。格闘技の練習では、片腕は背に回し、片足を折り曲げて、ボールを太

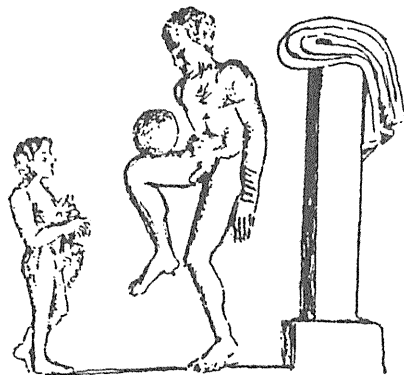


図4



図 5



図 6

腿の上で維持しなくてはならない。饗宴の場面では、中身をこぼすことなく、鉢や皿を、足裏を裏返して引き上げた脚の上で、弓なりに曲げた身体上で、あるいは屹立した性器の上で、バランスをとって支えることが余興として行われた。マグナ・グラエキア〔イタリア半島南部からシチリアを含む古代ギリシャ植民地の通称〕やエトルリアやギリシャでは、三世紀まで「コッタボス」*kottabos* という遊びが行われていた。背の高い金属性の心棒の頂点に、(右腕と左足を上げて) 交差的にバランスを取っている小像が置かれている。心棒の先端に不安定に置かれた上部の皿が落ちると、小像が抱え持つ心棒の下部の皿マネス *manès* が鳴り響く仕組みだ。参加者は遠くから杯の中身を上部の皿に投げ入れて、皿を落として遊ぶ(図 7、図 8¹⁶ 参照)。

「アスコリアスモス」*askôliasmos* の遊び(ブドウの収穫期に、空気で膨らませた皮袋の上に片足で立つ)や、ターラント〔南イタリアの都市〕



図 7

の「エンプーサ」*Empuse*（片足の悪魔）の遊びなど、すべての遊びにおいて、豊穡や植物の成長に結びつく儀礼的な内実は徐々に失われていった。

アスコリアスモスは、アッティカのディオニュソス祭の一環として行われ、皮袋はディオニュソス神に犠牲として捧げられた雄ヤギの皮で作られる。シャム〔旧タイ〕では、種まき期になると、バンカル王 *Bancal* は一日中左足で立ち続けなければならない。もし右足をついてしまうと王位が危うくなり、種まきが失敗に終わる。

片足裸足の人物、または履物があろうとなかろうと、片足で立たなければならない人物が、多くの農耕儀礼に登場する。デオンナによれば、それは大地の肥沃さと人間の多産を願っての神々への祈りの儀式の仕草である。

だが、片足立ちの儀礼がなぜこの役割を担うのだろうか。上述の論理の流れに沿えば、おそらく大地を揺さぶることのない一本足において、増大し強化された生殖力が集約されるからではないだろうか。



図 8

生殖能力の精髓としての半身像

ここで次の疑問に立ち戻ろう。片足立ちの儀礼や片足裸足がこの生殖関連の機能をもつのであれば、それは男性の右側面像とどのような関係にあるのだろうか。

J・プシルスキー¹⁷の数点の研究と、J・エルベール¹⁸の著書において、「アジャイカパド」*Ajaikapad*、すなわち性的な生殖力への言及が見られる。そのアジャイカパドだが、一本足の者の

ことも指す。それは唯一の行為しか行わない者、つまり「子をなす」procréerというたった一つの行動しかできない者のことだと上掲書は説明を付加している。

するとここでデオンナの仮説が活きてくる。片側だけの身体などの「単一性への還元」も、またその反対である手足の増加の類も、いずれも力の強化を象徴し示唆する。だがどの力でもよいわけではない。男性による創造的ないし生殖的な力である。

アレクサンデル・セウェルス〔三世紀の第二四代ローマ皇帝〕の時代のシノーペーの貨幣¹⁹にはこの概念の精髓のごときものが描かれている。人間の右脚の上に牡牛の頭部が載っている。この奇怪な像がなんらかの崇拝の対象物であるということは、炎の上がった祭壇が足元に置かれていることからわかる【図9参照²⁰】。

ここには複数の表象が凝縮されている。非対称の身体。牡牛という雄性の精髓。頭部の貯蔵部における子種の暗示——なぜならば、多産性の象徴である片脚と片足が〔頭部という〕この生殖能力の貯蔵部に直接付けられているからだ。この雄の生殖能力の強化を表す単一性への還元。

右足、頭蓋、牡牛という三つの象徴を集結させることで、この図像は本質的なものに直結している。

こうした視点に立つと、側面像が右側から見られた男性像であることに、なんの不思議もない。ここでは、側面性とは、両性の差異という、本質的な非対

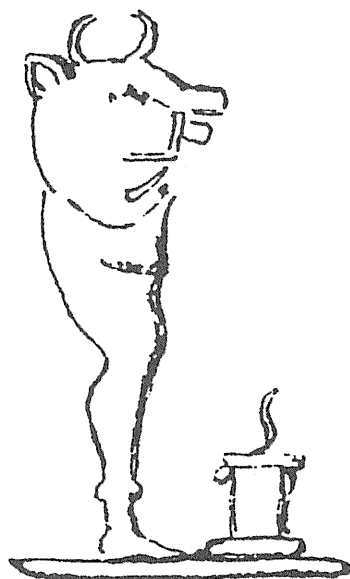


図9

称性の図像上の表象にほかならないからだ。

したがってニーダムの誤りを指摘しなければならない。ほぼ普遍的に見られるこの独特の表象は身体的な強固な制約に拠らず、ひとえに知的かつ象徴的な性質の操作に拠るものだ。それはちょうど人間の精神が必然的に非対称的な形体の存在を想定するのと同様だと彼は論じている。

だが、人体を縦に二分するという思いつきから行う解釈表現が、単なる発想に肉体的な基盤を与えるわけではない。むしろ逆で、さまざまな象徴的な価値が凝縮されている、この独特の表象の基盤にこそあるのが、男性の性的な力の優越の存在なのである。

ゆえに筆者から見れば、ニーダムが提起した疑問は無意味である。個々の事実が間違っているからではない。誤った比較分析から導かれた仮説は、結局のところ、明白でわかりきった結論にしか行き着かないからだ。随所においてひとしく近似的かつ合同的である社会的・イデオロギ的な装置は伝播もするし、内発的必然性をも有するという仮定を彼は行っている。その結論とは、身体的な必然性や生物学的な由来なしに長期的に持続する不変項なるものが、純粋に象徴的な基盤においてどうやら存在するらしいということだ。

各種の説話において明瞭にまたは暗示的に現れるさまざまな表象や概念を同じひとつの領域の中で関連づけるという、また別の分析方法を採れば、より広大な全体像の輪郭を描くことができるだろう。その全体像とはこうだ。半身像という男性化された形象は概念上の「全体」の一部として有意であるはずなのに、逆に「男＝人」homme-Homo の最も深く身体的である部分に根を張ってしまっている。それが両性の差異ということなのだ。

【注】

- 1 Rodney Needham, « Unilateral figures », in *Reconnaissances*, Toronto/Bufo/ London, University of Toronto Press, 1980, p. 17-40. (以下、注は断りのあるもの以外は著者による原注.)
- 2 【図1】 チュクチ〔シベリアの民族〕の精霊, Rodney Needham, *Reconnaissances* の表紙カバーの挿絵 (Waldemar Bogoras, *The Chuckchee*, Jesup North Pacific Expedition Publications, VII, Leiden Brill, 1909).
【図2】 白海海岸で発見された新石器時代末期の洞窟画の複製 (Musée du ski à Umeå, Suède, in Barquins, 1992).
【図3】 カレリアのオネガ湖畔で発見された新石器時代末期の洞窟画の複製 (Musée du ski à Umeå, Suède, in Barquins, 1992).
- 3 〔訳注〕 本章では「心的」psychique は「肉体的」somatique の対義として用いられる.
- 4 A. Szabó, « Der Halbe Mensch und der Biblische Sundenfall », *Paideuma* 2, 1941, p. 95-100.
- 5 G. Hatt, *Asiatic Influences in American Folklore*, Copenhagen, E. Munksgaard, 1948.
- 6 A. E. Jensen, « Die Mythische Vorstellung vom Halben Menschen », *Paideuma* 2, 1950, p. 95-100.
- 7 W. Deonna, « “Monokrèpidès”. Celui qui n’a qu’une sandale », *Revue de l’histoire des religions* 89, 1935, p. 50-72.
- 8 D. Zahan, « Colors and body-painting in Black Africa : the problem of the “half-man” », *Diogenes* 90, 1975, p. 100-119.
- 9 〔訳注〕 D. Zahan, « Colors and body-painting in Black Africa : the problem of the “half-man” », *Diogenes* 90, 1975, p. 100-119.
- 10 D. Zahan, « Colors and body-painting in Black Africa : the problem of the “half-man” », *Diogenes* 90, 1975, p. 100-119.
- 11 W. Deonna, *op. cit.*
- 12 S. Reinach, « Bronzes figurés de la Gaule romaine », in *Bibliographie des monuments figurés grecs et romains*, t.V, Paris, Firmin-Didot, 1891.
- 13 〔訳注〕 カルタゴの女王. アイネイアースに裏切られたディドーは薪の炎に飛び込んで命を絶った.
- 14 〔訳注〕 コルクスの王女. 夫イアソンの父アイソンを魔術によって若返らせた.
- 15 【図4】 アッティカの墓碑 (*Bulletin de correspondance hellénique* VII,

-
- 1883, planche XIX, in Deonna, 1959, 10).
- 【図5】裸のエフェボス像, 鉢に描かれた赤い人物像 (Corpus Vasorum, France, n°17, Louvre, n°10, III, 1b, pl.14, n°6 [F/129], in Deonna, 1959, 14).
- 【図6】バランスをとるシレノスまたはサテュロス, 壺に描かれた赤い人物像 (Weege, *Der Tanz in der Antike*, n° 104, fig. 141, in Deonna, 1959, 16).
- 16 【図7】壺に赤で描かれたコタボスに興じるシレノスたち. 円盤に投擲しようとしている (Saglio-Pottier, *Dictionnaire des Antiquités*, article Kottabos, 867, fig. 4306, in Deonna, 1959, 19).
- 【図8】ペルージャのコタボスの小像 (*Rom. Mitt.*, 1986, pl. XIIb, in Deonna, 1959, 22).
- 17 J. Przyluski, « Études indiennes et chinoises », I : « Les Unipèdes », in *Mélanges chinois et bouddhiques*, vol. 2, Bruxelles, Institut belge des hautes études chinoises, 1933, p. 307-332.
- 18 J. Herbert, *La Mythologie hindoue, son message*, Paris, Albin Michel, 1979.
- 19 *Revue archéologique* II, 98, 1910, fig. 1.
- 20 【図9】アレクサンデル・セウエルス帝時代のシノーベ貨幣. 牡牛の頭部が人間の一本脚の上に乗っている. その前には火を灯した祭壇. (*Revue archéologique*, 1910, II, n° 98, fig. 1, in Deonna, 1959, 38)